

## 飛行機研究家，二宮忠八の明治 36 年

薬学雑誌 1903 年度 328 頁，1906 年度 656 頁

明治の薬学雑誌を読んでいると思いがけない人物に出会う。例えば先月紹介した「人頭黒焼き売買事件(明治 35 年)」の道修町での様子を書いたのは、なんと二宮忠八である。飛行機開発の世界的パイオニアとして吉村昭の小説(虹の翼)やテレビにも取り上げられ有名であるが、このとき彼は意外なことに薬学会の大阪地区通信員であった！

明治 20 年 22 歳で陸軍に入隊，衛生兵として勤務，演習行軍中にカラスの滑空を見る。少年の頃から奇抜な凧を工夫して作ることが好きだった彼は、以来、毎夜薬剤師国家試験の勉強に加えて飛行機の研究を続け、明治 24 年、ライト兄弟に先立つこと 12 年、ゴム動力のプロペラ式飛行機を飛ばした。当時の日本の科学水準を考えると奇跡のような偉業である。さらに人が乗れる両翼 2 メートル、車輪もある玉虫型飛行機をつくるも個人ではこれ以上無理であった。そこで兵器としても有用なことから 3 回にわたって軍に上申するが、いずれも荒唐無稽と却下される。

こうなったら独力で開発しようと資金を貯めるために除隊、明治 31 年、設立されたばかりの大阪製薬に営業部員として入社した。以前本欄でも紹介したが(42 巻 11 号 1132 頁)、会社は大日本製薬を吸収、社名変更する。その間、彼は懸命に働く一方、難溶性であった内服用殺菌剤、結麗阿曹篤(クレオソート)の溶解性を高めたクレオゲストを発明したことで、明治 36 年薬学会の総会演説に選ばれた(薬誌には 4 頁にわたる講演要旨がある)。小学校卒の二宮が帝大教授や博士の丹波、田原らと並んで講演したことはこれまた偉業である。さらに下剤の  $MgSO_4$  を精製した二宮舍利塩は内国博覧会で金賞。彼は大阪精薬合名会社を設立、ようやく資金も貯まり、多忙な業務の合間を縫って一人で飛行機製作を再開する。

しかし、明治 41 年石油発動機を載せる機体を作成中、新聞でライト兄弟の偉業を知る。ショックと悔しさで飛行機をハンマーで叩き壊し、暫くは口も聞けなかったという。その後、大日本製薬の支配人まで出世、大正になって二宮の飛行機研究を知った軍や国から表彰もされたが、悔しさ、寂しさは一生消えなかっただろう。

小林 力

薬学雑誌は明治 14(1881)年の第 1 号から無料ネット公開されています。 [http://ci.nii.ac.jp/vol\\_issue/nels/AN00241525\\_jp.html](http://ci.nii.ac.jp/vol_issue/nels/AN00241525_jp.html)